

# ホトトギス



三月号

ホトトギス

昭和二十一年三月二十七日  
明治二十年三月二十一日  
昭和十九年三月二十一日  
昭和十九年三月二十一日  
昭和十九年三月二十一日



## 俳句随想 〔二百九十七〕

汀子

「田鶴」の前主宰であったホトトギス同人桑田青虎さんが亡くなった。まだ十代であった青虎さんが義兄の塚原夜潮の手引きで少年桑田善一郎という本名でホトトギスに投句を始めたのが昭和三年。夜潮は水原秋桜子と共に昭和六年ホトトギスを出て「馬酔木」に拠ったため青虎さんも「馬酔木」に転じ、その後、「寒雷」に投句するが飽き足らず、後藤夜半に師事、昭和三十四年よりホトトギスに再投句、年尾に傾倒した。やがて「田鶴」を主宰し「田鶴」をホトトギスへの登竜門と位置づけて大勢の俳人を育てて来た。桑田青虎と松尾緑富は年尾にとつてまさに助さん格さんであり、年尾が日本各地から県単位のホトトギス会に招待され忙殺されるのを心配し、日本を九ブロックに分け、各県はブロック内で輪番制で年一回各ホトトギスブロック同人会大会を開催するというアイデアを出し率先してその案を纏めて下さったのも青虎さんであった。今もその方法が定着してその結果かえって各地でホトトギスが盛んに活躍出来るようになった。「田鶴」は娘の水田むつみが青虎の後を継いでがんばっているがその見通しも青虎の早い決断の賜物であった。

句日記

汀子

平成十八年三月四日 芦屋ホトギス会

春塵を払ひ再会果たしたる朝の間のしめり乾きて春の土

三月五日 関西野分会

風に会ひ風をまとへば柳の芽芽柳の色となりつゝ風と合ふ朝の間の晴はつづかず春の雨古き葉の行方は知れず柳の芽日帰りの旅は身軽よ春の雨

三月五日 下萌句会

こぞりたる草の芽踏んであしことを朝の間の晴ぐんぐんと春らしく春めきて旅の話の行き交へる

三月六日 ロイヤル俳壇

留守居せる雛のつぶやきありにけりあなどりてならぬ外出や春の雷日の当る水面生き生き水草生ふ届きたる旅の消息春の雷向き合はぬ女難男難の心はも

三月九日 清交社

風よりもれに応へたる柳の芽皆肩に触れて行く道柳の芽鮎子の句の一品加はりぬお水取古都の夜空の膨らみぬ又一人春らしき色装ひて駆けるてふ気配はじまる御水取

三月十日 工業倶楽部

野遊といふには風の強かりし遠ざかる鶴の残像引きにけり野遊といふほどもなく大地踏み

三月十四日 大阪倶楽部

藪椿目立たずに咲き目立ちけり春めくと思ひ又又あともどり霞より霞見てあて抜けられず見えて春めく文字の生まれゆく鉛筆くと書いては消して今日のこと

三月十四日 綿業倶楽部

又雪を連れて来し雲春の山脱稿の心放てり春の山空仰ぐたび帰る鴨見送りぬ

三月十五日 夏潮句会

草摘みてをり近道をしてをりし初花の気配に視線集りぬ一つこと成りしと穴を出し蛇りよく見れば紅梅盛り過ぎてをりもう少し目を高く上げ帰雁追ふ咲きすゝむほかなき花の日和かな

三月十六日 くつろぎ謝恩の会

梅林となるかは知らず地に下ろすかの日より忘れぬ月日亭隴木々芽吹くつぶやき谷の深きよりしつとりと古都の春雨濡るるとも

三月十八日 関東ホトギス俳句大会前日句会

はかりごとせしはこの宿春の雨高からぬ古都の山々道隴宿隴山路に古かりはじめけり

三月十九日 関東ホトギス俳句大会

快晴の梅の名所といふ覚悟雑踏や梅の名所といはれても波隴太平洋の夜明け来し邂逅の句碑は隴の海を見て記憶とは不確かなもの梅椿

三月二十日 アサヒカルチャー吟行

初花のふえつつありぬ旅帰り旅衣着替へもならず春寒し

春眠といふ旅疲れとも云へて

三月二十三日 きつろぎ会

茅花より離れぬ風のあることを霞みても富士を探しぬ空の旅

三月二十四日 時雨句会

遠ざかる心茅花に置いて来し茅花より茅花へ曲る風の道

三月二十五日 句会と講演の会

雲雀野に心放ちてより帰路に春塵とはつきり言へぬまま拭ふしだるるは雨脚枝垂桜かな

三月二十六日 野分会

朝寝してしまへば狂ふスケジュール豪華とも見ゆる一品白魚汁

三月二十八日 有恒倶楽部

芽柳に又降り出して春の糸芽柳にそふ風の糸雨の雨

三月二十八日 無名会

庭巡り来て加はりぬ春灯嘯立つき当るより順路とる水温むこは音なき流れかな人生をもて語る謝辞あたゝかし道迷ふことも承知の花の風

摘草の大地やさしくなつてをり見えてあし富士を霞に失へり

春雷に町の渋滞はじまれば

風雨去り人の往来又長閑

春雷の止めば町中動き出す

春雷の遠ざかりしを確かめて

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成十八年三月一日 若水会吟行句会第二日

波音の交響曲となる臚

一輪の菫の為にある斜面

三ツ石の先より震動き初む

鳶の輪の東風に歪んでをりにけり

磯開待つ三ツ石の騒きかな

三月一日 一水会

雛市や五人囃子に見つめられ

この独活の二本に迷ふ厨妻

三月二日 蕉心会

春の川水惑星の一部分

授かりし一句大事に二日灸

春の猫東京弁で鳴いてをり

春泥をつけていつもの猫であり

雛のやうに真知子姉さん現はるる

白梅や苗蕉稲荷といふ静寂

吃水を下げ大川の水温む

孕猫てふ腹をしてまだ食ふか

下萌を猫の鼻先まさぐれる

三月九日 土筆会

春暖炉ドイツ風窓ロシア風

衆生界鎮め里山笑ひ初む

啓蟄といふ存問の庭であり

春暖炉老柳山莊開け放ち

三月十二日 「花鳥」六十周年、五百号祝句

祝ぎ色の東風に押されて会場へ

春灯下紫煙も祝ぎの香を持てり

三月十三日 朝日カルチャー若草句会

春雨といふ口実の屋台かな

君と会ふ春雨傘を目印に

春霖や雲の変幻自在なる

震災の日を見し雛でありにけり

三月十六日 登高会

葺煮て隠れ家的な地下の店

又西へ東風に吹かれて逝きし人

早蕨の斜面太陽知つてをり

朝東風に収まりの良き都心かな

三月十八、十九日 関東ホトトギス俳句大会

梅よこの印籠が目に入らぬか

十五代將軍を知る春埃

水音も鴨の帰心を促せり

句碑の辺に初音整ひつつありぬ

春潮を拒む渚の角度かな

三月二十日 草木瓜会

春泥を勲章として餓鬼大将

春泥を固めて昨夜の風であり

莖立ちて丹精の畑ありにけり

春泥に猫もうかれてゐるやうな

京野菜てふ彩りに莖立てり

莖立といふ香りあり味のあり

三月二十一日 目黒学園句会

春泥の現れ北国の目覚かな

この風が草の芽育てをりにけり

朝ミサといふ踏青でありにけり

白銀と春泥の聞き合ひかな

あをきふむ古墳の主は知らねども

名草の芽名もなき草の芽の下に

三月二十八日 若水会

如月といふ言の葉を羽織りけり

遠景といふ絶景のミモザかな

初雷に山覚めてゆくさめてゆく

初雷や万物に喝入るる如

花ミモザ洋館といふ竹まひ

# 雑詠

## 廣太郎 選

点滴の冷やかな手をさすりやる 宝塚 水田むつみ  
 秋草を引き寄せ句帖手離さず 同  
 シベリウス共に聴きぬる通夜の月 同  
 明月と聞きて力ーテン開けておく 姫路故桑田青虎  
 病床をなぐさめ呉れし思草 同  
 足さすりくれし吾子の手あたたかし 同  
 枯蓮を隔てゝ潮見櫓見ゆ 福岡 松尾緑富  
 枯蓮や城の盛衰思ふとき 同  
 城濠の枯蓮を刈る日数読む 同  
 新涼となりゆく日々にひと心地 たつの 浅井青陽子  
 短日を少し覚えて横川路に 同  
 二三枚柄の葉供へ年尾の忌 同  
 半日は秋耕もして句碑を守る 神戸 山田弘子  
 秋耕の鋤を短く使ひをり 同  
 虚子館の地下には地下の秋の声 同  
 邯鄲の昼鳴き雨の縷々降れる 河内長野 吉年虹二  
 玄室へ潜る四五歩に地虫鳴く 同  
 同病の過去持ち傘寿子規祀る 同

果てのなきことを果てとし天高し 大阪 蔦三郎  
 秋深む夜が廻つて来るたびに 同  
 秋は行く赤を淋しき彩として 同  
 罽雲より 大空の物語 熊本 岩岡中正  
 これまでのことこれからのこと月に 同  
 熔岩といふ幾万年の秋思かな 同  
 何一つ聞かず咎めず爛熱く 香川 湯川 雅  
 独り言にも返事して温め酒 同  
 冬紅葉一樹その他はその他の樹 同  
 秋声として一堂に満つ 諷経 東村山 村松紅花  
 ここに城ありきと落葉ただ深く 同  
 城ありき鮭上る川堀として 同  
 咲きそめて萩繚乱の日も近し 長岡 安原 葉  
 龍子画く素材の庭も秋深し 同  
 露寒の地震の日またもめぐり来し 同  
 柿食べる俳句は子規にはじまりし 熱海 嶋田一步  
 柿を食ふ子規虚子年尾逝きて吾 同  
 柿食べて虚子先生とぬし日あり 同  
 青空に在る粒々は冬桜 同  
 老いて人長療養や冬桜 同  
 試歩の径 吾は見舞客冬桜 同  
 稲の香のなほさすらへる刈田かな 神戸 長山あや  
 ともしびの育つはやさよ暮の秋 同  
 初霜といふ天地のレクイエム 同

## 雑詠句評（二月号より）

昭代・弘子・小木菟  
仁義・比奈夫・一步  
暮潮・純也・雅  
基子・廣太郎

### 梅雨晴の風に重さのまだ残り 神戸 保田 晃

梅雨晴とは五月晴の傍題にある。云うまでもなく梅雨最中の晴れ間ではあるが、「風に重さのまだ残り」という下五のまだに句意が込められていると思う。長かった梅雨にうんざりしていた矢先、久々の晴間にいよいよ梅雨明かと一瞬の期待が過つたものの、風はまだまだ重たく、梅雨明には今一つ至らぬ事を感じとつた作者、失望感と梅雨も終りの頃の季節感が適確に表現されている。

（昭代）

鬱陶しい梅雨の間にと気持ちよく晴れた日は心も晴々とするものだろう。しかしやはり梅雨の最中、どこか風も少し湿つたような感じがするのも事実である。そのような心持ちも感じ取れる

句である。「風に重さのまだ残り」という言葉が平明に、的確に表現されている。（廣太郎）

### 風は秋西への旅もよからんと 秋田 浅利恵子

いまやホトトギス中堅として確かな地歩を築いた感のある作者だが、何よりもその作風の推移に私は注目している。嘗てはシャープで知的処理の感じられた作風が、やや鈍角とも思える、それでいてしみじみとした情を感じさせる作品へと変化してきたようだ。中央からは少し遠い地方に住む作者だが、なかなかどうして機敏なフットワークで色んな行事にも積極的に参加しておられる。暑い間は億劫な遠出だったが、ふと肌に触れる風にいち早く秋を覚え、こんな風に誘われて西の方への旅もいいなあと、そんな気持ちを吐露した一句だ。こうした計らいを感じさせない句こそ上品だとこのごろしきりに思える。また「西」は西方浄土を連想させるあたりも一句の流れとともに非凡である。（弘子）

勝手な想像であるが、東北にお住まいの作者から見て、やはり「西」という方角は、何か温もりを感じるのではないかと思うが、実は作者は平成十八年十一月十八日に五十八歳の若さで天に召されてしまわれた。それを意識すると、何か「西」というのは特別な意味を持っているのではないかと思ってしまう。

（以下略）

（廣太郎）

天地有情

女子選

天界へ移る鶴唳仰ぐのみ 神戸 千原叡子  
 露の世の果てたる青虎物語 同  
 瓢の笛家郷を恋ふや病床に 姫路 桑田青虎  
 今日には妻来ぬ日となりし夜半の秋 同  
 秋曇に似し愚鈍なる文明よ 豊中 瀧 青佳  
 明日知れぬ身を考へる葦なりし 同  
 おない年座主には会へず西虚子忌 たつの 浅井青陽子  
 書写風苔むす句碑に年尾の忌 同  
 移転の荷積まれいよいよ灯下親し 東京 稲畑廣太郎  
 夜仕事を終へて移転の荷を解く 同  
 星一つとんで銀河に溺れたる 相模原 木村享史  
 我に過去汝には未来天の川 同  
 梟の鳴く夜はこはし母の陰も 樞原 稲岡 長  
 冬帝の威に日輪も人間も 同  
 瓢の実のどこか綻びある音色 神戸 山田弘子  
 かかる夜は仕事は野暮よ寝待月 同  
 人々に菊にと虚子の燭ゆらぐ 八尾 岩垣子鹿  
 何もかも露けきものとして比叡 同

モーツアルト聞かせしといふ新酒出来 神戸 後藤比奈夫  
 利酒といふ疾く回る新酒あり 同  
 照り翳るたび秋深む湖の色 箕面 井上浩一郎  
 眼白押しよりこぼれたる一羽かな 同  
 一塊の火の山として露けしや 熊本 岩岡中正  
 白昼の斑猫音もなく闘ふ 同  
 人ひとり会はぬ冬晴古都の路地 長岡 安原 葉  
 短日の車走らす一古寺へ 同  
 新そば屋曲り阿吽の像に逢ふ 東京 坊城俊樹  
 枯蓮に影といふものなかりけり 同  
 其の後の帯塚訪ひぬ爽やかに 福岡 松尾緑富  
 手入れゆき届く帯塚秋日濃し 同  
 秋声や立ち止まりまた立ち止まる 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 その奥の灯ともり初めて鹿の声 同  
 をかしみは句のかくし味宗鑑忌 神戸 長山あや  
 ひたすらに走り来し秋ふと惜む 同  
 色町に知らぬ路地なし阿波踊 徳島 上崎暮潮  
 かんばせをはみ出せる笑み阿波踊 同

# 天地有情句評

汀子

おない年座主には会へず西虚子忌 たつの 浅井青陽子

同い年の座主に会うのが楽しみで比叡の山に遙々来たのに、体

調を崩しておられるとは……。

露の世の果てたる青虎物語 神戸 千原叡子

桑田青虎さんの見事な生涯と言えども幽明境を異にしてしまう

露の世の厳しい現実。

今日は妻来ぬ日となりし夜半の秋 姫路 桑田青虎

最後まで妻を恋うやさしさを持つていた青虎さん。

秋曇に似し愚鈍なる文明よ 豊中 瀧 青佳

すつきり晴れてくれない秋に似てなんとじれつたい文明なのだ

ろっ。

夜仕事を終へて移転の荷を解く 東京 稲畑廣太郎

発行所移転という大仕事の荷を解く時の感慨。

星一つとんで銀河に溺れたる 相模原 木村享史

流れ星の行方に心置く作者の詩心。

粟の鳴く夜はこはし母の陰も 榎原 稲岡 長

子供の頃の怖い話を思い出した作者の母恋。

かかる夜は仕事は野暮よ寝待月 神戸 山田弘子

見事な寝待月を仰ぎ、仕事のことを忘れたい。